

他科の先生に  
知って欲しい

## 豆知識・・・眼科編⑦

### 経口抗がん剤TS-1®による眼科的副作用

医療法人眼科康誠会 井上眼科 井上 康



現在、使用されている内服薬や注射薬の眼科的副作用としては、ステロイドホルモン剤がステロイド白内障やステロイド緑内障の原因となること、抗コリン剤が閉塞隅角緑内障の発症のきっかけになること、エタンブトールが視神経障害を起こすことが良く知られています。最近ではインターフェロン投与によるインターフェロン網膜症が注目されました。

以前から、タキサン系（パクリタキセル、ドセタキセル）や5-フルオロウラシル（5-FU）など抗がん剤による眼科的副作用も時おり報告されていましたが、症例数も少なく、生命予後が不良な症例も多いためか、大きく取り上げられることはありませんでした。ところが最近になって、経口抗がん剤TS-1®による眼科的副作用が急速に増加してきています。TS-1®は5-FUのプロドラッグであるテガフル、5-FUの分解阻害剤であるギメラシウム、消化管への毒性を軽減するオテラシルカリウムからなる合剤です。内服でありながら5-FUの高い血中濃度を維持できるため効果が高いこと、消化器系の副作用が少ないことから胃癌をはじめ各種のがんに幅広く長期間使用されるようになったためと考えられます。

TS-1®による眼科的副作用のひとつは角膜上皮障害です。血液中から涙液中に移行した5-FUにより角膜上皮幹細胞が障害されると角膜上皮の修復機能が低下し、点状表層角膜症とよばれる角膜上皮欠損が発生します。休薬期には改善することが報告されていますので、可能であれば投与スケジュールの変更、もしくは他剤への変更を考慮していただければと考えています。角膜上皮幹細胞の障害が高度になると角膜が混濁し、重度の視力障害をきたすこととなります。

もうひとつの眼科的副作用は涙道閉塞です。眼表面の涙液が鼻腔へ排出される排水管を総称して涙道と呼びます。涙液中に移行した5-FUにより涙道内腔上皮の肥厚と間質の線維化が起こり、涙道の中でも再建が最も難しい涙点から涙小管の間に、広範囲かつ重度の閉塞をきたします。結果的に、いつも涙液がこぼれる流涙症となるだけでなく、過剰な涙液により視機能も障害され、読書や運転などに支障が生じます。TS-1®投与後3～6カ月の発症が多いことが報告されており、早期であれば涙道カテーテルの挿入（涙管チューブ挿入術）によって管腔を確保することができます。可能であれば投与直後から、少なくとも流涙の訴えがあれば早急に一度眼科受診をお勧めいただければと思います。